

研究の道しるべに 心からお薦めできる良書

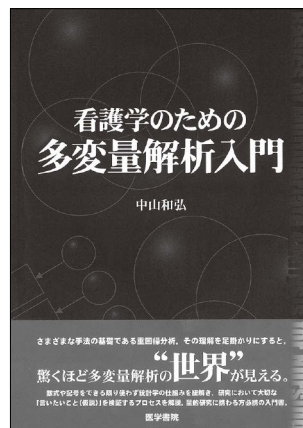
評者◎川崎涼子

大分県立看護科学大学広域看護学講座地域看護学准教授

看護学のための多変量解析入門

中山和弘（著）

本体 4200 円 + 税 / 医学書院（Tel：03-3817-5657）



本書を読めば多変量解析の手法だけではなく、統計学としてデータを扱う際の基礎的な考え方や、データの扱いといったプロセスをよく理解できる。近年、多くの看護学研究において多変量解析が用いられているが、その基本的な考え方や手法が非常に明快到に記載されている。

まず、第1章では、変数となるデータの種別を踏まえてデータの分布、代表値について丁寧に述べられており、初学者には特に貴重である。

第2章では、2変量の関連を見る方法が「量と量、量と質、質と質の3つしかない」と述べて読者を導いたのち、それぞれの関連の分析方法、図表の描き方、検定の意味について順を追って説明している。説明変数と目的変数を明示したデータ例やグラフ例が常に示されており、難解さを感じることなく読み進められる。ここまでで統計解析の基本を押さえられるように説明がなされており、次の多変量解析の章へとスムーズに読み進めることができる。

第3章からの多変量解析の解説についても、手法の説明から始めるのではなく、まずは「なぜ多変量解析が必要なのか」を身近なテーマのデータ例を示しながら述べている。変数(データ)をきちんと理解することの重要性を丁寧に述べることにより、先の多変量解析の理解が得やすくなるよう工夫されている。

その後の章では、目的変数が量的データか質的データか、説明変数が質的データか量的データかによって変わる多変量解析の手法を、一つ一つ手順を追って説明している。

多変量解析の基本が重回帰分析であることが説明されているので、重回帰分析から読み進めてもよいが、自分の研究テーマで扱うデータの種類によって、共分散分析やロジスティック回帰分析、一般化線形混合モデルといった章に読み進めることができる。さらに因子分析についても説明されている。

特筆すべきは、例として挙げられる研究テーマとその変数(データ)が、看護学生や大学院生、看護学研究者にとって非常に身近で分かりやすいものとなっていることである。また、著者が看護学研究分野における教育経験で培った初学者の陥りやすい過ちにも触れている。こうした著者の経験をもとにした説明により、変数の性質や、結果の解釈における落とし穴などへの理解が容易となるだろう。

看護研究に用いる統計学に関する書籍のうち、基本を押さえ、順序正しく多変量解析を学びたいという初学者から中堅の方々、臨床看護師や大学院生、看護系教員、研究者には貴重な道しるべとなる。分かりやすさとマニアックさがよい具合に混ざり合っており、大学院生への説明にも役立つだろう。心からお薦めできる良書である。